

ほんのしるべ

書標

2016.
12月号

2016年12月5日発行（毎月1回5日発行）
通巻457号 昭和61年7月15日第三種郵便物認可



世界の本屋さん

vol.60

ポーランド・ワルシャワ ボレスワ・プルス書店

ノセ事務所
能勢 仁



ワルシャワ大学正面前にボレスワ・プルス書店はある。直訳すると「科学の書店」ということになる由。店の前の通りはエルサレム通りである。

店は一階三十坪、横長の店である。一階には奥に喫茶室がある。ここは一般読者がよく利用する部屋である。この空間から二階にゆける。二階も喫茶室である。誰でも利用できるが学生のゼミ、コンパ、グループの集いに使用されることが多い。

地階は本、文員の売場である。従業員は女性一名がいてキャッシャーも兼ねている。踊り場売場は、一階から地階売場に行く途中の空間に設けられた売場である。

一階の商品：外交、ポーランド史、近代ポーランド史、世界史、人類史、音楽、美術、ワルシャワのアルバム、哲学、伝記、追想、戦争の思い出手紙、世界社会学、世界政治、歴史の平台に「Historia

Japan」があった。

地階の商品：法律、税法、刑法、EUの法律、ガイドブック、外国語、教育学、心理学、理科系の本、ヨーロッパ学、ペーパーバックスの小説は一五〇円、三〇〇円、四五〇円、六〇〇円に分類されていた。踊り場の商品：バーゲンセール陳列場である。ペーパーバックスが主で、ハードカバーは殆どない。

この店は人間の温かみが伝わってくる店であった。一階レジ担当の女性、接客してくれた女性社員、喫茶店にいた女性社員、皆親切で親日的であった。店長の男性が小生にこの店の建物の歴史の本をプレゼントしてくれた。社員は一階五名、喫茶一名、地階一名である。店の前にあったベンチに座ったらシヨパンの曲が流れてきた。シヨパンの国だと思った。

新酒が入庫した酒屋には青い旗が立てられ、また酒問屋には得意先の小売りに予め予約注文されていた酒を、早速「配り酒」と称して配達し始めます。そして、その酒は直ちに小売り屋から出入りの屋敷や、商家へ一升、二升と届けられ、こうして江戸の街は一番船の到着と同時に、いよいよ酒のうまい季節へと入っていくのであります。

『酒肴奇譚』

小泉武夫著（中公文庫）より



もくじ

世界の本屋さん 60

「書標」歳時記〈12月〉

著書を語る(336)

「2016年カープの歩みと

広島アスリートマガジン初優勝

までの製作奮闘記」

広島アスリートマガジン編集部

牧本 直丈

書標・書評 『反・民主主義論』ほか

特集 音楽と科学の共鳴

ささやかな暮らしを考える

今月のおすすめ

コンピュータ	15	自然科学	16
医学書	17	社会科学	18
人文科学	20	文学・芸	21
文庫・新書	22	芸術	23
実用書	24	地図・旅行書	24
語学・辞典	25	児童書	26
読者から			
インフォメーション			
本屋うらばなし	30		
「とある書店とカープの一年」	27		

※表示価格はすべて本体価格です。

「2016年カープの歩みと

〳〵広島アスリートマガジン初優勝〳〵 までの製作奮闘記」

広島アスリートマガジン編集部・牧本 直丈



カープが二十五年ぶりにリーグ優勝を果たした今年、創刊二十三年目を迎えた広島アスリートマガジン（毎月二十五日発売）にとつては、創刊以来、初優勝を体験する〳〵記念すべき年となった。ここでは、弊誌が初優勝を体験するまでの二〇一六年の製作奮闘記を振り返っていききたい。

二〇一六年の一発目となった一月号は、年越し号ということもありコンセプトは〳〵年賀状〳〵。笑顔の新井貴浩選手とともに「今年こそ共に笑いましょ」と、カープ選手と編集部の願いを込めたタイトルとして今年の弊誌はスタートした。キャンプを控えた二月号では、前田健太投手が退団し、次世代のエースとして期待される大瀬良大地投手。「エース襲名」と期待を込めたタイトルとした。誌面には大瀬良投手を筆頭に今村猛投手、一岡竜司投手の〳〵カピバラ三兄弟〳〵と親しまれる三投手が登場。大瀬良投手と一岡投手は故障で苦しんだが、結果的に三人揃って歓喜の姿があったのは編集部としても嬉しい出来事だった。

春季キャンプがスタートした三月号では、当時〳〵ポジション

獲得まであと一歩〳〵の鈴木誠也選手を表紙に起用。「鈴木誠也の可能性」と題した表紙は、キャンプで練習に臨む直前にグラウンドで撮影。あの時、期待のホープであったことは間違いないが、まさかこんなにブレイクするとは……。三月二十五日、シーズン開幕日の発売となった四月号では、今季投手キャプテンとなり先発投手陣の柱として期待される福井優也投手が表紙を飾った。「覚悟はあるか？」という力強いメッセージをタイトルとした。開幕号ということもあり、今季選手会長に就任した小窪哲也選手にも取材し、カープの新たなチームリーダー二人を軸に特集を組んだ。両選手とも自身のことだけでなくチームについても熱く語り、リーダーの自覚を感じさせてくれた。

カープが開幕ダッシュに成功した四月、弊誌に大きな変化があった。より高級感を追求するため、表紙に加工を加え、カラーページを増量し六年ぶりのリニューアルを実施。リニューアル一発目の表紙はカープの元気印・菊池涼介選手。「執念」と題して製作した表紙画像は、ナイター終了十五分後にそのまま取材に駆けつけてくれて撮影。戦いを終えたリアルな表情で、リ

ニューアル一発目に相応しい表紙を製作できた。

シーズン序盤話題となった、新井貴浩選手の通算二〇〇〇安打達成は六月号で特集した。表紙はもちろん新井選手。「新井選手の偉業達成を祝おう」というコンセプトでの表紙撮影では「とびっきりの笑顔で」という要望に快く応えていただき、新井選手の最高の笑顔を抑えることができた。この記念号は表紙のインパクトのおかげもあり大きな反響を得た。今年初の売り切れという嬉しい結果だった。そしてカープが開幕から好調をキープし続けていた六月二十五日発売・七月号では、カープ打線不動の三番打者・丸佳浩選手が表紙。菊池選手同様、昨季不振のリベンジを果たすべく、好調な打撃を続けていた丸選手には、代名詞でもある「敬礼ポーズ」でキメてもらった。雑誌ロゴも丸選手をイメージして初のピンク色を採用し、カープファンが見れば「一目で丸選手特集号」にすることができた。三十二年ぶりの十一連勝とカープの勢いが増していた八月号では、「神つてる」男・鈴木誠也選手が今年二度目の表紙。お立ち台での「最高です」というイメージを表現するため、マツダスタジアムのグラウンド内で爽やかにガッツポーズをキメてもらった。あの表紙、実は三試合連続決勝本塁打を放った数日後に撮影した一枚。「あれはホントまぐれつすよ(苦笑)」と謙遜する鈴木選手がとても初々しかった。

「優勝」が現実味を帯びてきた九月号ではついに黒田博樹投手が登場し、創刊以来初の黒田投手&新井選手の同時取材に成功。「黒田、新井と優勝じゃ」というタイトルで、表紙には創刊以来初となる「優勝」の二文字を掲載。表紙はもちろん投打の両雄を採用し、今年初のプレー中写真で躍動感溢れる表

紙となった。

そして九月十日、ついにカープは二十五年ぶり七度目のリーグ優勝を果たした。創刊以来初の「優勝特集号」となった十月号では、緒方孝市監督の歓喜の胴上げ、優勝バッテリーが抱き合う場面、そして黒田投手と新井選手が涙の抱擁を交わすシーンを組み合わせて表紙とした。その時期、編集部は同時に優勝までの軌跡をまとめた「特別増刊号2016カープ優勝の軌跡」製作にも追われ、カープ優勝のおかげで「嬉しい多忙な日々」を送っていた。カープ優勝後は十一月号で二ヵ月連続の優勝特集号、十二月号では激闘の日本シリーズ、歓喜の四十一年ぶり優勝パレードを特集するなど、創刊以来初めての特集を組んだ一冊を二ヵ月連続で製作することができた。カープにとつて輝けるシーズンとなった二〇一六年、広島アスリートマガジン編集部にとつても忘れられない号を製作し続けた、記念すべき一年だった。



『広島アスリートマガジン10月号』
サンフィールド・800円



『広島アスリートマガジン特別増刊号
2016カープ優勝の軌跡』1600円



『反・民主主義論』

佐伯啓思著

新潮新書・七四〇円

苟も「民主主義」を標榜するものは、民主主義批判と正面から向かい合わなければならぬ。すべての立場、意見を尊重した自由な討議こそ、民主主義を支える前提だからだ。そして、その作業は、何よりも民主主義を鍛えることになる。

佐伯は、デモクラシーを「民主政」と訳すべきだと言う。それは、今我々が採用している一つの政治制度に過ぎず、長所もあれば短所もあるからだ。それを民主「主義」と呼んだ途端、何か崇高な理想を含むものとして神聖化されてしまう。

その時、デモクラシーの重要な意義が失われる、と佐伯は言う。その意義とは、人間はかなりの確率で判断を誤ると見る「人間可謬説」から出発するということである。デモクラシーの核となるのは、多様な意思と利害を前提とした意思決定に必要な謙虚さと自己批判能力なのだ。「民主主義こそが正義」と言ってしまうとたんに、それらは失われる。

同じことは「護憲」にも言える。憲法を「神聖にして侵すべからず」とする主張は、憲法がひとつの政治的価値の選択であること、そしてその選択には熟考、議論、覚悟が不可欠であることを忘却させる。

数の取り合いである選挙制度は、人びとを均質化し同質化する。だが、一人ひとりの「個人」は、矛盾に引き裂かれ、悩み、承認しつつ抗う存在である。文学は、政治が決して見ようとしぬ「個人」の本質に迫る。全く異質な営みであるがゆえに、政治と文学は、相補的なのだ。佐伯啓思の反民主主義論は、陰画として、民主主義がどうあるべきかを、むしろ鮮やかに映し出している。(フ)

『比ぶ者なき』

馳 星周著 中央公論新社・一七〇〇円

大化の改新から壬申の乱を経て、都は飛鳥に移り、天武天皇没後は皇后が持統天皇となり、鎌足の子、藤原不比等らを使い、大宝律令をつくり、都は藤原京に移る。持統天皇後の文武天皇は若くして亡くなり、母が元明天皇となり、唐の長安を模した平城京をつくる。こうして古

代国家から、天皇を中心とした律令国家が完成する。

この物語は、持統天皇即位から平城京成立にかけての藤原不比等の姿を描いています。読み始めてすぐに、この時代の歴史をほとんど忘れていたのに気づきました。他の歴史小説ではそのまま読み進めますが、この作品はそうもいきませんでした。慌てて日本史の教科書などを引っ張り出して、ざっとおさらいしてから再度読み始めると、一気に面白さが加速しました。

不比等は壬申の乱の影響で、高位の官職に就くことができなかつたのですが、その間に帰化人から唐や朝鮮の文化や政治を学び、知識を蓄えます。そして、雌伏の時期にとんでもない野望も蓄えていきます。

稀代の策略家、不比等が天皇も操って、すべての権力を握るために歴史を動かしていく姿に、ここまでするのかと思ひながらも、どんどん惹きつけられます。持統天皇とのお互いを利用しようとする駆け引きのすさまじさ、また、ライバルたちとの激しい権力闘争も読みごたえがあります。

登場人物も馴染みのある人物が出てきます。柿本人麻呂は不比等の策略に重要な役割を果たし、長屋王は最大のライバルとして登場します。

古代が舞台のノワール小説、たっぷり堪能してください。(丸)

『昭和十八年の冬 最後の箱根駅伝』

早坂 隆著 中央公論新社・一八〇〇円

正月の風物詩である箱根駅伝は、一九二〇年に第一回を開催し現在に至るまで続く歴史ある大学駅伝大会である。多くの人が沿道やテレビで、襷をかけ必死に走る学生に思いを寄せ応援する。

九十年以上の歴史の中で、太平洋戦争中にも一度だけ開催されていた。それが昭和十八年に開催された「靖国神社・箱根神社間往復 関東学徒鍛錬継走大会」である。戦争中という暗い時代、多くの規制や困難が、当時の学生に立ちまわっていた。箱根駅伝どころではなかった。そんな時代だが、多くの学生たちの走りたいという強い気持ちで、太平洋戦争中にもかかわらず、ただ一度開催をすることができたのかもしれない。靖国神社から箱根神社を目指すという今の箱根

駅伝とは違わなかった。長い箱根駅伝の中で公式記録として扱われている。

一九四三年、決して現在のように華やかな気持ちではなかったと思う。物資も足りず、生きていくのに精一杯な時代だったと思う。当時の学生は、「この駅伝が終わったら戦争。これが最後の箱根駅伝だ。」という覚悟をもってレースに臨んだそうだ。生きている証を箱根駅伝で残そうとして走っていたのだろう。「タスキの重み」という言葉があるが、多くの先輩たちの哀歎が詰まっている一本のタスキを繋ぐという、箱根駅伝の歴史の重みでもある。

『昭和十八年の冬 最後の箱根駅伝』は、当時のランナー、関係者に取材し記憶として史実を掘り起こしている。

二〇一七年正月の箱根駅伝は、歴史の重みを感じながら楽しんでみようと思う。

(鈴)

『シャクルトンの大漂流』

ウィリアム・グリル作 千葉茂樹訳

岩波書店・二〇〇〇円

一九一四年八月八日、英国の探検家アーネスト・シャクルトンと二十七人の勇敢な隊員たちは、エンデューアランス号に乗って南極大陸横断の探検へと出発した。しかし、希望に満ちたその探検は、南極の流水に行く手を阻まれ、ついには氷の圧力によって、エンデューアランス号が沈没して終わりを告げる。

そこからの帰路は、想像を絶する困難な探検となった。七日七晩かけての犬ぞりでの行進、数か月の不安なキャンプ、流水が漂う冷たい海の危険な航海。偉大なリーダー・シャクルトンの優れたリーダーシップやその不屈の精神が、個性あふれる隊員たちをまとめ、幾多の絶望的な状況を乗り越える力となり、ついには全員を無事生還させることに成功した。

以前、新潮社から『エンデューアランス号漂流』という本が刊行されていたが、現在は品切れで入手困難になっているのが非常に残念だ。また、中公文庫ではシャクルトンの手記を読むことができる。本書はその名作の良き副読本となるだろう。いずれも、シャクルトンとその仲間たちへの深い敬愛の感じられるすばらしい作品だ。

(司)



音楽と科学の共鳴

「数学と音楽よ！ 人間の思考の中で考えられるかぎりもつとも明白な反対物よ！ であるにもかかわらず手を結び、互いに支え合っている！」

——ヘルムホルツ「音楽の和声の生理学的原因について」（二八五七）

十九世紀の大科学者ヘルムホルツの右の言葉に導かれるかのように書かれた、興味深い本が出ました。

ピーター・ペジック／竹田円訳『近代科学の形成と音楽』（N T T出版・五〇〇〇円）

本書は、音楽が数学、天文学、物理学、生理学など、科学の幅広い分野に与えた影響を、歴史の流れに沿って検討しています。

太陽系の惑星がメロディを奏でているというケプラーの「天体の音楽」はわりと有名かもしれませんが、本書によると、無理数の概念、光の波動説、電磁気学、そして量子物理学の誕生にまで音楽が関与していたというのだから驚きです。十四世紀フランスの自然哲学者オレームにはじまり、教科書でおなじみのガリレオ、ケプラー、デカルト、ニュートン、

オイラー、ヤング、ファラデー、ヘルムホルツ、リーマン、プランクといった錚々たる科学者たちが登場します。一風変わった科学史というだけにとどまらず、音楽や人文思想に関心のある人にもとても興味深い本だと思います。

著者のペジックはもともと物理学を専攻した科学史家で、これまでもたくさん本を書いています。彼は彼はプロのピアニストでもあるそうで、さらにフツサール、ベンヤミンといった「人文系」の教養も豊か。そうした文・理・音楽が融合したユニークな個性が生んだユニークな本です。



『近代科学の形成と音楽』

というわけで、今回の「愛書家の楽園」は、この本にかこつけて「音楽と科学の共鳴」といえる本を集めてみました。

ベジックの本の日本語訳として、「空はなぜ青い？」という素朴な疑問に対する科学者たちの探求を描いた『青の物理学』、自然というラビリンス（迷宮）に踏み込んで近代科学の形成に貢献した科学者たちを描く『ラビリンス』、そして

編著ですが数学・物理学・哲学に通暁し深い思索を展開した大学者ワイルの講演集『精神と自然』の三冊が現在入手可能です。どれも本書と重なる部分がありますが、音楽はあまり前面に出てきていません。ちなみに、現在品切の『アーベルの証明』（日本評論社）には、ピタゴラスとケプラーについての章があり、音楽の話も出てきます。

ピーター・ベジック／青木薫訳『青の物理学——空色の謎をめぐる思索』（岩波書店・二六〇〇円）

ピーター・ベジック／小沢元彦訳『ラビリンス——科学の隠された意味を探る』（三交社・二三〇〇円）

ヘルマン・ワイル（ピーター・ベジック編）／岡村浩訳『精神と自然——ワイル講演録』（ちくま学芸文庫・一六〇〇円）

古代の音楽と科学

西洋の音楽理論は紀元前六世紀のピタゴラス（ピュタゴラス）にはじまります。次のような神話的な物語が知られています。

ピタゴラスが鍛冶屋の前を通りかかったとき、ハンマーで鉄をたたく音が聞こえた。ハンマーは全部で五本。それらの音は、互いに重なり合うと協和音を発した。ピタゴラスはそれらの中に、オクターブと五度と四度の協和音があることに気づいた。ただし、ひとつだけ協和しない組み合わせ（＝不協和音）があった。

ベジックの本に推薦文を寄せている比較文学者ダニエル・ヘラー＝ローゼンの著書『第五のハンマー』がこの物語の思想的意味を論じていますが、未邦訳。

キティ・ファーガソンの『ピュタゴラスの音楽』はピタゴラスの生涯と思想、そして後代への影響を、紀元前六世紀から二十一世紀という長大なバースペクトイプで述べている興味深い本です。『ピタゴラスの定理』だけでなく、音楽論にも触れられており、プトレマイオスやケ

プラーによるその継承にもページが割かれています。

キティ・ファーガソン／柴田裕之訳『ピュタゴラスの音楽』（白水社・三四〇〇円）

ピタゴラス以後の展開を知ることができ重要な原典の貴重な翻訳が日本語で読めます。『古代音楽論集』がそれで、ギリシア音楽理論のキモであるハルモニア論（音階理論）を二本収めています。音程を数比だけで決めるピタゴラス派の方法論を排し、耳で聴いた音をもとに音階理論を確立したアリストクセノスの「ハルモニア原論」とアリストクセノスを批判的に継承したプトレマイオス「ハルモニア論」です。プトレマイオスは精緻な天動説理論を展開したことも有名です。

アリストクセノス、プトレマイオス／山本建郎訳『古代音楽論集』（京都大学学術出版会・三六〇〇円）

音楽はこの時代、現代の意味での「芸術」というより「学問」でした。算術・幾何・天文とともに、最も基本的な教養科目とされた「四科（クアドリヴィウム）」

を構成していったのです。プラトンやアリストテレスも、音楽によく言及します。たとえばプラトン『国家』にも、ピタゴラス学派の音階論や「天体の音楽」の話が出てきます。

プラトン／藤沢令夫訳『国家』（上・下、岩波文庫・各二〇〇円）

ピタゴラスのハンマーの話は、後出の金澤正剛『中世音楽の精神史』、ペジックの『アーベルの証明』（日本評論社・品切）でも触れられています。

中世の音楽と科学

こうした古代の音楽理論は五、六世紀の新プラトン主義者で「最初のスコラ哲学者」と呼ばれるボエティウスの著書『音楽教程』を通して中世に伝えられました。それがキリスト教と結びついてどのように西洋音楽に影響を与えたかは、ヨーロッパ中世・ルネサンス音楽研究の大家・金澤正剛氏の本に詳しいです。

金澤正剛『中世音楽の精神史——グレゴリオ聖歌からルネサンス音楽へ』（河出文庫・一一〇〇円）

また、ギリシアの音楽論は西洋建築に

も影響を与えました。ローマ時代の建築家ウィトルウィウスの『建築十書』や、ルネサンス期のアルベルティの『建築論』がその先駆ですが、さらに近代・現代に至るまで音楽と建築の関係を考察した好著が五十嵐太郎・菅野裕子『建築と音楽』（NTT出版・二八〇〇円）です。

ケプラーと天体の音楽

ニュートンに影響を与え、近代科学の基礎を築いたヨハネス・ケプラーの宇宙論は、星々はハーモニーを奏でながら運動しているという古来の「天体の音楽」の思想に基づいていました。時は十七世紀、ケプラーは単旋律の「古代の音楽」ではなく当時の新しい音楽であるポリフォニー（多声音楽）をモデルに惑星運動を考えます。ケプラーは各惑星がどの声部を担当しているのかも特定しただけです。ソプラノは水星、アルトは地球と金星、テノールは火星、バスは土星と木星とのこと。ペジックの本の関連サイト <https://mitpress.mit.edu/music-science/> で、この「天体の音楽」を聴くことができます。なんだかサイレンみたいな音です。そして何とその原典である『宇宙の

調和』も邦訳があります。ヨハネス・ケプラー／岸本良彦訳『宇宙の調和——不朽のコスモロジー』（工作舎・一〇〇〇〇円）

ちなみにほぼ同時代のイエズス会司祭キルヒヤーによる『普遍音楽』という本があり、これも工作舎から（抄訳ですが）邦訳書が出ています。パツハやヘンデルなど後代の作曲家たちにも多大な影響を与えたとのことですが、濹澤龍彦的というか、なかなかの奇書です。音楽形式についてのていねいな解説の一方で、ナマケモノの歌、歌う魚、猫オルガン、拡声器、盗聴装置、会話する彫像、自動作曲機械などの不可思議な事物が次々に登場。一見の価値があります。

アタナシウス・キルヒヤー／菊池賞訳『普遍音楽——調和と不調和の大いなる術』（工作舎・四八〇〇円）

近代の音楽と科学

そして近代を開いた大哲学者たちの多くは自然科学者でもありました。というか当時は「自然哲学」といって、哲学と科学は未分化だったようです。デカルト、

ライプニッツ、カント……みんなそうです。ニュートンの名著『プリンキピア』の正式名称は「自然哲学の数学的原理」でした。デカルトには「音楽提要」という音楽研究があるのですが、残念ながら品切。図書館で探しましょう。

デカルト／平松希伊子訳『音楽提要』（増補版デカルト著作集「4」白水社所収）

近代和声と数学

近代西洋音楽の土台となったのは、作曲家ジャン・フィリップ・ラモールの和声理論です。トニックとかドミナントとかいう用語をつくったのがラモールです。難解なこの理論を、フランス啓蒙思想の中心人物でデイドロとともに『百科全書』の編集責任者を務めたダランベールが解説した入門書が翻訳されています。ジャン・ル・ロン・ダランベール／片山千佳子・安川智子・関本菜穂子訳『ラモールの原理に基づく音楽理論と実践の基礎』（春秋社・三八〇〇円）

ラモールより二十歳ほど年下で、ダランベールとはほぼ同時代を生きた十八世紀の代表的数学者レオンハルト・オイラー。

指数関数と三角関数の関係を表す「オイラーの公式」、数論、ゼータ関数、位相幾何学、グラフ理論など、現代数学につながる数々の業績を残しました。そのオイラーが音楽が大好きで、若き日に「音楽がなぜ喜びや悲しみを表現できるのか」を音響学的に探求したことはあまり知られていません。親切・丁寧なダンハムの『オイラー入門』にもオイラーの音楽論は出ていませんが、巻末のオイラー全集の総目次に音響学についての論文があることが示されています。

W・ダンハム／黒川信重・若山正人・百々谷哲也訳『オイラー入門』（丸善出版・二七〇〇円）

物理と生理の出会いとところ

音は、音響という物理現象と、それを知覚する人間の生理という二つの側面があります。十九世紀後半、この「音」という現象の二重性に挑み、現代の音響学の先駆となった大著がヘルムホルツ『音感覚論』です。これも日本語で読めるのはありがたい。

ヘルマン・フォン・ヘルムホルツ／辻伸浩訳『音感覚論』（銀河書籍・二九八〇円）

一般相対性理論の概念的基礎を与えたいわゆるリーマン幾何学を生みだし、今日にいたるまで解決していない「リーマン予想」を残した天才数学者リーマン。そのリーマンがヘルムホルツの『音感覚論』を承けて「耳の力学」という未刊の大論文を遺していることはあまり知られていません。リーマン幾何学の端緒となり、「多様体」という概念を提起したリーマンの未来的な講演の翻訳が、何と日本語で読めます。しかも文庫で。これは要チェックです。

ベルンハルト・リーマン／菅原正巳訳『幾何学の基礎をなす仮説について』（ちくま学芸文庫・一〇〇〇円）

現代イギリスの数学者マーカス・デューソートイは秀逸な数学エッセイストですが、音楽に対する傾倒も深いようで、著書の中でしばしば音楽に言及します。「数学界のワグナー」リーマンが残した世紀の難問「リーマン予想」を縦糸に、ヒルベルトからコンヌまでさまざまな数学者が登場するベストセラー『素数の音楽』は「素数が奏でる音楽を聴こうとした天才たちの姿を描くノンフィクション」。

さらに『シンメトリの地図帳』では、第九章「四月——シンメトリの音」で、パツハ、モーツァルト、シエーンベルク、クセナキスなどの作曲家の音楽の中の「シンメトリ」を探っています。

マーカス・デユ・ソートイ／富永星訳『素数の音楽』（新潮文庫・八九〇円）
マーカス・デユ・ソートイ／富永星訳『シンメトリの地図帳』（新潮文庫・九四〇円）

現代の音楽と科学・数学

第二次大戦後に登場した電子音楽やコンピュータ音楽は、二十世紀の科学技術（テクノロジー）思考と音楽の結合と言えます。いわゆる前衛（アバンギャルド）音楽をリードした巨匠シュトックハウゼンの、現代音楽論の古典ともいえるテキストが、シュトックハウゼンに精通する清水穰氏によって日本語で読めます。就中、電子音楽に関連した「いかに時は過ぎるか……」音楽的時間の統一性は必読。

カールハインツ・シュトックハウゼン／清水穰訳『シュトックハウゼン音楽論集』（現代思潮新社・四二〇〇円）

ピタゴラスの同国人で、確率論や集合論などの数学を取り入れ、コンピュータを駆使した音楽をつくり、映像、建築にも手を染めた作曲家イアニス・クセナキスも重要です。その思想をコンパクトに示す『音楽と建築』（高橋悠治訳、全音楽譜出版社）は残念ながら品切になって久しいですが、前出の五十嵐太郎・菅野裕子『建築と音楽』（N T T出版）が、クセナキスと彼の建築の師ル・コルビュジエについて一章を割いています。

ソニック・スタディーズという分野があります。いわば「聴覚文化研究」。サウンドスケープ（音の風景）の概念を提唱したマリイ・シエーファー『世界の調律』（平凡社ライブラリー、品切）や、音楽が社会変化の先触れとなるというジャック・アタリ『ノイズ』（みすず書房）、そしてドイツ・メディア論の巨魁フリードリヒ・キットラーの『グラモフォン・フィルム・タイプライター』（ちくま学芸文庫・品切）などを先駆とするファイト・アールマン、ジョンサン・スターンなどが代表者で、日本でも研究者が増えています。音響再生の歴史とイデオロ

ギーを分析し、メディア論や感性の歴史に新たな視点を拓いたスターンの代表作『聞こえる過去』が邦訳されています。ジョンサン・スターン／中川克志・金子智太郎・谷口文和訳『聞こえる過去——音響再生産の文化的起源』（インスタクリプト・五八〇〇円）

最後に、壮大なスケールで書かれた楽しい本を。「われわれは、どんな過去にさかのぼっても音楽に出会う」ということで、ビッグバンから始まった「宇宙の音楽」の歴史を「音」と「調和（ハーモニー）」をキーワードに壮大なスケールで描くユニークな本です。

浦久俊彦『138億年の音楽史』（講談社現代新書・八四〇円）
(N T T出版 柴)

*愛書家の楽園・特集「音楽と科学の共鳴」で紹介した書籍は、ジュンク堂書店池袋本店一階エレベータ前と福岡店三階、丸善名古屋本店一階と京都本店地下二階にて、十二月十日～一月九日までフェア展開中です。

ささやかな暮らしを 考える



私はビジネス書の担当をしています。入荷する新刊書を書棚に並べたりする普段の作業のなかで、すこしもやもやと引つかるものがあります。

仕事の本や自己啓発本、資格の本やお金に関する本では特に、すぐに結果を求める傾向が強く、さくつと合格したり、すぐに金持ちになったり、最速で結果を出したり、何事もポジティブにとらえれば万事うまくいく、といった本が多く出版され、棚に並んでいます。なか本を棚に入れていても追いついて立ってられているように感じてしまいます。

一方で、人間関係の悩みに関する本や、メンタルタフネスに関する本、怒りをコントロールする本も多く、皆さん追いつてられながら心の平穏を強く求めているようです。

そんな風景を日々見ながら、何かもつとこう本屋ってこんなものじゃないのではないかと思うのです。皆どれだけ不安なんやと。求められている幸せがひとつの形しかないように思えても来ます。その形以外はみとめられないようなプレッシャーを感じます。

でも、そんなものなのでしょうか。

幸せなんてものは時代や状況によって左右されるものとは思えません。

坂口恭平『独立国家のつくりかた』

（講談社現代新書・七六〇円）

坂口さんは3・11の時に独立国家を作り、独自在被災者を受け入れたひとです。

かつて路上生活をしている人に弟子入りし、その生活を学ぶ中で、この人たちは世の中のルールからははずれた生き方をしているが、決して貧しい生活はしていないことに気づきます。坂口さんによると世界には幾層ものレイヤー（層）があり、我々は普通表層のレイヤーしか意識していないけれど、彼らは表層とは違うレイヤーの存在に気づき、生活をしているのだと。それに彼らは巧みに二重行政のはざまのような土地を見つけ、そこに家をつくることで、手の出づらない状況を作っていました。

坂口さんはそんな土地を探し出し、自分のものと宣言し、独立国家を作っています。突拍子もないことですが、ものの見方を変えることで、世界が楽しくなることを教えてください。

松本哉 『世界マヌケ反乱の手引書』

(筑摩書房・一三〇〇円)

松本哉さんは「素人の乱」でイラク戦争の時に最初にサウンドデモを企てた人で、リサイクルショップやゲストハウスなどを経営しながら、アジアで消費社会とは一線を画す「金をあまり使わないで楽しく生きる」暮らし方を探る人々と交流を重ねています。

放置自転車の撤去に反対する「俺のチャリを返せデモ」などふざけたデモもたくさんやっています。私たちが普通だと思っている生活を送っている同じ時にこんなふざけたことをまじめにやっているひとたちがいることを知り、愉快な気持ちになります。松本さんたちは「貧乏人」として国家にも企業にも依存しないで暮らす、賢い生き方を放棄した「マヌケ」な生き方を模索しています。

佐々木中

『切りとれ、あの祈る手を』本と革命をめぐる五つの夜話

(河出書房新社・二〇〇〇円)

デモや独立国家を作れなくても、この本には「世界を変える、つまり革命の本

体は本を読むことにある。」と書いています。佐々木さんは「本を読むということだ」下手をすると気が狂うくらいのことだ」といいます。本気で読んで正しいと思っただことをまともなうけとれば世界は変わるんだと。ルターの革命は聖書を読んだことで始まった。聖書を読み、聖書を翻訳し、そして本を書いた。そして、革命は起きた。としています。この方法ならば革命なんて大それたことはないませんが、末端としてすこしくらいなら世界を変えることに手を貸せるかもしれません。



『切りとれ、あの祈る手を』

ヘンリー・D・ソロー

『ウォールデン 森の生活』

(上下巻、小学館文庫・各八五〇円)

十九世紀末の作家ソローが、一番近くの家でさえ一マイル(約一六〇〇メートル)離れているアメリカ・マサチューセツ

ツ州にあるウォールデン池のほとりに丸太小屋を建て、自身の思索と自給自足の生活をつづった本です。たまに近所の人々が何時間も池に住むカエルとにらめっこするソローを見かけることがあったそうです。弱音を吐くことなく自分の信じることを徹底的に貫く静かな強さに圧倒され、感じ入ります。

谷口尚規／石川球太

『冒険手帳 火のおこし方から、イカダの組み方まで』

(光文社知恵の森文庫・七八〇円)

ソローのような真の自由を求める森の生活にあこがれながらも、普通はなかなかそこまで踏み切ることができません。そんな時この本をばらばらめくると、火の熾し方や獲物を捕獲する方法、砂漠で水を得る方法、さらにはオオカミを捕まえるワナの作り方まで載っていて、空想野生サバイバルが体験できます。

柳宗民／三品隆司『柳宗民の雑草ノオト』

(ちくま学芸文庫・一一〇〇円)

公園や道端でよく見かける雑草の解説本ですが、三品隆司さんの画がとても繊

「細で美しく、雑草と一言でまとめて言ってもよく見ると個性豊かなことに気づきます。こちらにも空想散歩には非常に役立つちます。

ギャヴィン・プレイター『ピニ

』『雲』の楽しみ方』

(河出書房新社・二四〇〇円)

『雑草ノオト』で地面を楽しむことを覚えたら、次は空の雲の本です。雲の発生する高度で章を分けて、その種類と特徴を説明してくれます。積乱雲の中に飛び込んだ人間がどうなるのか、興味ありませんか？ これは実際にあった話で、とてもスリリングに解説してくれます。この章だけでも読んでいただけば、今度空を見上げた時にその時と同じ雲があったら、今までよりずっと興味深く雲を眺めることができると思います。



『雲』の楽しみ方』

『作家の酒』

(平凡社コロナブックス・一六〇〇円)

井伏鱒二や吉田健一、小津安二郎などの作家や映画監督が、どんなお店でどんなものを肴に、どんなお酒をどんなふう飲んでいたかを写真付きで紹介してくれる本です。まあまあ自分にあっている仕事があつて、仕事が終わったあとにゆつくりお酒が飲めたら、だいぶ幸せなのではないでしょうか。

YADOKARI 編『アトムミニマリスト』

(二葉書房・一五〇〇円)

生きるために働く。生活の糧を得るために、欲しいものを手にするために、手に入れたものを守るために過ごす毎日。違和感を覚えた人たちが始めた、小さな暮らしの形を紹介する本です。皆さん自分で小さな家を作ったり、地域とのつながり方を模索したりして、自分の望むものと向かい合つて整理し直し、暮らすことに挑戦をしています。小さな家の写真もあり、これまた皆さん楽しそうだなと思います。

さて、それでも私たちはそこまでと

がった生き方はできないので、働かなくてはいいけません。

松浦弥太郎

『1000の基本』しごとときほん くらしのきほん100』

(マガジンハウス・各一五〇〇円)

世の仕事の本がスピードと結果を強く求めているのに対し、雑誌「暮らしの手帖」前編集長でもある松浦さんはじっくり、きっちり、ていねいにすることを教えてくれます。

新聞をきれいにたたんで戻すこと。

お願いをするときは相手が断れる余地を残すこと。

何かをするときは、それが美しいかというも考えること。普通のことを普通にきちんとやってみればいいのだと発見すると、焦る気持ちが少し和らぎます。落ち着いて考えればあたりまえではありませんが、自分にできることしかできないのだと再確認させてくれることと思います。

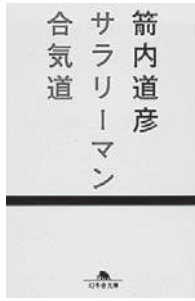
箭内道彦『サラリーマン合気道』

(幻冬舎文庫・五三三円)

箭内さんは広告のトップクリエイター

です。でもこの人は大学に三回落ち、就職しても自分の個性を出せず、七年以上も悶々と働いていたそうです。そんな箭内さんの仕事術が、力が抜けた感じで面白いです。

積極的に緊張する。とか、目を見て話さない。とか、イエスマンになる。とか、自我にこだわらず受けながら、流しながら結果を出していて、すこし力を抜いてする仕事のやり方もありますよとお薦めしたいです。



『サラリーマン合気道』

ミヒヤエル・エンデ『モモ』
(岩波書店・一七〇〇円)

この本は一見ビジネス本と関係ないように思われるかもしれませんが。仕事にハマって人生を楽しむことを忘れてしまった人たちは、じつは節約できたと思っていた時間を「時間泥棒」に盗まれていて、

主人公モモが盗まれた時間を取り戻すためにたたかいはじめたという物語です。

モモは不思議な魅力を持っていて、だれかが一生懸命モモに話すと、モモは何も言わないのに話す人はすっかり気分が良くなって、ものごとは自然に解決し、ずつとけんかをしていた人もいつのまにか仲直りしてしまいます。主人公のともだちのベツボじいさんというひとは道路掃除をする人なのですが、こう語ります。とてもとても長い道路を掃除するとき「これじゃとてもやりきれない」と思ってしまう、「そこでせかせかと働き出す。どんどんスピードをあげてゆくとときどき目をあげて見るんだが、いつ見てものこりの道路はちつともへっていない。」「だからもつとすこいいきおいで働きまくる。心配でたまらないんだ。そしてしまいは息がきれて、動けなくなってしまう。道路はまだのこっているのにな。こういうやり方は、いかんだ。」「そしてつづけて「いちどに道路せんぶのことを考えてはいかん、わかるかな？ つぎの一步のことだけ、つぎのひと呼吸のことだけ、つぎのひと掃きのことだけを考えるんだ。いつもただつぎのことだけ

けをな。』

「すると楽しくなってくる。これがだいじなんだな、たのしければ、仕事がうまくはかどる。こういうふうにはやらにやあだめなんだ。』

これは人間関係や仕事のやりかたの極意なのではないでしょうか。

『人生に、寅さんを。』

(全二巻、キネマ旬報社・各二二〇〇円)
ご存知、「男はつらいよ」シリーズからの名言集です。

寅さんは言います。「人間、生きていると、ああ生まれてきてよかったな、って思うことが何べんかあるじゃない。そのために人間生きているんじゃないのか。』

本屋にはいろいろな本があります。ただ目的の本を探すだけではなく、時間があれば本屋の中を寄り道していただければ、きっと思いがけずいい本を見つけたことができると思います。

(三宮店・桑川)

今月の
おすすめ

コンピュータ

新装版 達人プログラマー

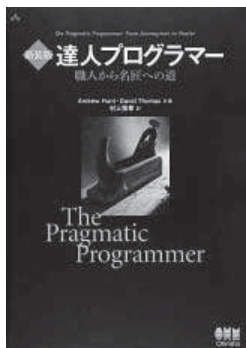
Andrew Hunt・David Thomas 著

村上雅章訳

長らく入手困難だったベストセラーが、新装版となって待望の復刊。日進月歩のコンピュータ業界にありながら、初版から十六年も経つ本書が復刊を強く望まれたのは、時代を超えた普遍性を持っているからに他ならない。技術そのものというより、問題解決に対するアプローチといった、プログラマーとしての心構えを説いた本。

オーム社

三二〇〇円



精霊の箱 上・下

川添 愛著 前作『白と黒のとびら』

(同社・二八〇〇円)で魔術師に弟子入りした少年が、今度は新米魔術師として数々の謎に挑む……あらすじはまるっきりファンタジー小説だが、れっきとしたコンピュータ書。主人公が様々な魔術の試練へと形を変えたプログラミングの問題に挑む姿を通して、計算とコンピュータの基礎を学ぶ。前作はオートマトンと形式理論について、本書ではチューリッグマシンを扱う。

東京大学出版会 各二六〇〇円

消極性デザイン宣言

消極性研究会著

ひとが消極的になってしまう場面や理由を分析し、デザインの力で解決しようというのが本書。著者の一人が開発した、おしゃべりがうるさい相手に「やめて」と言えない人のための装置「スピーチジャマー」は、ひとを笑わせ考えさせる作品に贈られるイグノーベル賞を受賞した。消極的な態度の中にこそ、デザインの種が埋まっていることを教えてくれる。

ビー・エヌ・エヌ新社 二〇〇〇円

初めは Watson

井上研一著

Watson は元々、米国のクイズ番組のために IBM が開発した質問応答システム。現在は企業や個人が利用できるクラウドサービスの API として提供され、登録後三十日間はその強力な機能を無料で試すことができる。本書は Watson をつかって「Water Bot」や顔認識アプリなどの人工知能技術を用いたサービスを開発する、実践的な内容。

リックテレコム 二二〇〇円

アポロ13に学ぶ

IT サービスマネジメント

谷 誠之、久納信之著 絶体絶命のト

ラブルに襲われつつも見事帰還を果たしたアポロ13号。その物語を描いた映画を参考書に、IT サービスマネジメントについて学ぶのが本書。宇宙飛行士をユーザ、地上の管制官をサービスプロバイダに例え、アポロ13号打ち上げで実際に起きたトラブルとその解決方法を、IT サービス提供の際に起こる様々な問題へと当てはめ、具体的に解説する。

技術評論社 一九八〇円

今月の
おすすめ

自然科学

「里山」を宮崎駿で読み直す

森と人は共生できるのか

小野俊太郎著

「山紫水明の地が、実は他国の水を消費する事で成り立つ国」であり、その上「自分たちの水は汚れていて、ゴミだらけになっている」という現状認識から、「美しい国、日本」のようなイメージに対するカウンターパートとして、宮崎駿の映画を幾つか引き合いに出して論じている。例えば『もののけ姫』のラストシーンにおける、「サンは森で、わたしはタタラ場で暮らそう、共に生きよう」というようなアシタカの結論は、タタラ場と森双方の問題を宙吊りにしているだけだと指摘し、「一時的な境界線ではない」という。それは、宮崎駿が「自然は偉大で、人に優しく、動植物は平和に共存している」というような自然観を嫌っているからこその宙吊りであった。

明治期における「風景の発見」（柄谷

行人）から一世紀経ち、一九九〇年代後

半、詩歌や絵画に共通する理想郷として

新たに回顧・発見された「里山」や「里

海」を再構築する端緒ともなる宮崎駿論

である。

春秋社

一八〇〇円

世界建築大全

より深く楽しむために

ジヨナサン・グランシー著

建築の本だと思っただけを繰れば、

いきなりメソポタミアの階段ピラミッド

で始まる。ルネサンスの宮殿と一七〇〇

年代の噴水と二十世紀の礼拝堂が一堂に

会したこの本は、建築物を忠に編まれた

「歴史図鑑」と呼ぶのが相応しい。工法

や装飾の変遷以外にも当時の壁画や周辺

世界の歴史年表などが記されているの

で、世界史の副読本としても楽しめる。

雨風をしのぐためなら屋根と壁さえあれ

ば事足りるというのに、日干し煉瓦を手

で積んでいた人類は摩天楼を易々と造る

までに進化した。建築の歴史を見るとヒ

トの貪欲さが恐ろしくも感じられる。

最後になったが函も出色の出来。建築

に興味がない方も一度「触れて」みて欲

日東書院

七〇〇〇円

雨の自然誌

シンシア・バーネット著

本を開いてみると、レイ・ブラッドベ

リが代表作『火星年代記』にしるした火

星の雨の描写から始まっている。

大地から空へ、空からまた大地へと循

環する水の粒の仕組みや、この事象が抱

える問題、環境における役割などについ

て、気象学や自然科学の分野だけでなく、

人の暮らしや文化の視点からもアプロー

チを試みた本だ。

あの時代に、あの国に、あの人の上に

降った雨は、そのときどきにより恵みに

も災いにも、ささやかな思い出にもなっ

て、記憶や記録に刻まれ残されてきた。

多彩なエピソードから浮き彫りになるの

は、今日の雨降りの仕組みには人間の

日々の営みも影響しているということ。

わずかながら、日本の和傘も本文中に

顔を出す。

人も自然の一部であるからこそその、身

近で親しみ深い、ひとことではない「自

然史」にふれる一冊。

河出書房新社

二七〇〇円

今月の
おすすめ

医学書

ゼロから始める補聴器診療

新田清一・鈴木大介著 小川 郁監修

今の日本では医療とは関係ない場所等で補聴器が販売されているのが現状である。リハビリをせず着けた結果、補聴器に対して悪い印象を抱いている方が多いのではないだろうか。本書で紹介している済生会宇都宮方式の聴覚リハビリテーションとは、補聴器を頻回に調節して脳に機能変化（リハビリ）を促し、音に慣れさせていく方法。また患者さんの力を最大限引き出すために、医療者が適宜上手に介入することも重要なポイントである。耳鼻咽喉科の医師や補聴器診療に携わるスタッフ、補聴器販売店の方にも必須の一冊となっている。

中外医学社

四二〇〇円

がん治療の疑問をメーリング
リストで解決した件。

日本臨床腫瘍薬学会編

「薬剤師が知りたいがんの疑問52件をパッチリ解説！」した本書は、日本臨床腫瘍薬学会会員限定のメーリングリストの内容を編集したもの。二〇〇八年に国立がんセンター東病院の研修生と職員により現在の前身となるメーリングリストが開設され、その後日本臨床腫瘍薬学会が発足して今に至る。ここでは薬剤師の「生の声」の質問とその返答の理解を深めるための解説やコラム、引用文献が補足されていて、普通の解説書とは違ったりアリティがある。

南江堂

三〇〇〇円



現場で使える

新人登録販売者便利帖

仲宗根恵著 一般用医薬品（第二類・第三類）の販売を行う登録販売者は受験

資格が緩和され、資格者が増えている。またセルフメディケーションの推進や販売所の多様化で需要が拡大している。本書は、新人登録販売者や、実務未経験で合格して業務につくのに戸惑いや不安を抱いている人に最初に手に取ってほしい書籍。現場の「まずやること&覚えること」や仕事の流れを紹介し、接客の基本である「聴き取り・病態の判断・商品の選択・提案・説明・アドバイスの仕方」を分かり易く解説している。実務経験を積み、自信をもって店頭に立てるようになるう。

翔泳社

一九〇〇円

死にゆく患者と、どう話すか

明智龍男監修 國頭英夫著

がん医療の専門家國頭英夫先生による日本赤十字看護大学での講義を書籍化。テーマは死にゆく患者さんとのコミュニケーション論。マニュアル通りにはいかない、正解のない問いに十三人の生徒たちが答えを出すべく真正面から挑む。数多くの臨床経験に裏打ちされた著者の歯に衣着せぬ言葉も、根源にある患者への、人間への想いが伝わってくる。

医学書院

二一〇〇円

今月の
おすすめ

社会科学

非伝統的金融政策

宮尾龍蔵著

今年に進展の目覚ましい金融政策について、政策当事者の手によって様々な書籍が刊行された。本書も二〇一五年まで日銀の審議委員をつとめられた宮尾教授による一冊である。理論と実証という観点から非常にコンパクトにモデルを解説しており、政策の効果、影響、副作用など今の金融政策を知るために必要な情報が平易にまとめられている。早くもマイナス金利政策から一歩進んだ政策にシフトすることが先の会合で決定された。今後を展望するためにも最適の一冊。

有斐閣

二二三〇〇円

移民の経済学

ベンジャミン・パウエル編

移民問題の専門家たちによる移民について、の先行研究をテーマごとに整理し、まとめたもの。経済学の実証研究が中心

になっているものの、一般人の感情論とは違った見解に至っていることを示している。ただし、移民を研究する研究者たちでも立場や持論が違うことや、分野によっては実証が十分でないことをも指摘している。それでも国際問題となっている移民問題について感情的な移民排斥論が強まっている現状に、一石を投じる意志を示す意思を感じる一冊。

東洋経済新報社

二八〇〇円

LIFE SHIFT

リンダ・グラットン、アンドリュース・コット著

前作『WORK SHIFT』（プレジデント社二〇〇〇年）が世界的ベストセラーとなったリンダ・グラットン氏の今回のテーマは、一〇〇年ライフ。

人々の寿命は延び、近いうちに一〇〇歳まで生きることが普通になる可能性が高い。本書はその場合に今までの教育・仕事・引退の三ステージ型の人生設計が成り立たなくなるといふ事実を突き付け、様々な働き方や自己投資を行き来するマルチステージ型の人生を提唱する。特に四十代以下の人にはこの変化は逃

れがたく、高齢化が進む日本では他国に先駆けてこの変化への対応を迫られる可能性が高い。日本語版への序文も充実。

東洋経済新報社

一八〇〇円

第四次産業革命

クラウス・シュワブ著

ダボス会議の創設者である著者が、いま世界は歴史的転換点を迎えていると論じる。近年、人工知能、IoT、自動運転車、ゲノム編集、3Dプリンター等、新技術が次々開発された。そのため経済やパイオ、環境や私たちの生活といった様々な分野で変化が急速に起きている。本書では各技術によってもたらされる近未来の影響を個別に解説。特に、AIやロボットに雇用が大量に奪われる状況には危機感を覚えた。ただそういう負の要素も一部にある反面、農業や医療等でのプラス面も多くあり、この革命を人類は上手に受け入れていく必要がある。

日本経済新聞出版社

一五〇〇円

ヤクザと憲法

東海テレビ取材班編

暴排条例が全国で施行された今、一般

社会との関わりを厳しく制限されたヤクザは、私たちの側からするといよいよ情報が少なくなり、闇に包まれた存在となつている。本書は今年初めに公開されたドキュメンタリー映画「ヤクザと憲法」の制作者が、取材の裏側をまとめた一冊。相手は違法活動を行つている組織。取材対象と一定の距離を保ちつつ、ヤクザの実態に迫る日々が綴られているのだが、全体に漂う緊張感が凄くて、その世界に飲み込まれるような力を感じる傑作だ。

岩波書店

一八〇〇円



同性婚 だれもが自由に結婚する権利

同性婚人権救済弁護団編

厚生労働省の研究班による性的指向調査によると、学校の一クラスに約一人は同性に性的指向が向くマイノリティであ

るという数字が報告されている。異性愛が普通とされる世間において、少数派の彼らは差別や偏見に苦しめられる。精神的健康を害し、自傷行為や自殺に至るケースも少なくない。本書には、そのような差別や、法の下での不平等により制度的にも苦しめられている当事者達の生の声が収録されている。同性婚を認めないのは憲法違反であると世間に訴える一冊。

明石書店

二〇〇〇円

自由が丘ブランド

岡田一弥・阿古真理著

東京都目黒区自由が丘の周辺は、観光客にも住民にも愛される魅力的な街だ。ただ現在のような人気を得るまでには多くの試行錯誤があり、苦闘の歴史が裏にはあった。商店街の組合理事長である岡田氏が、戦前から現在までのこの地区について詳細に語った内容となっている。行政や鉄道会社の協力もあったが、あくまで商店街が主体となって様々な取り組みが行われ、独自のブランドを確立させたことがわかる。近年、地元の産業能率大学との産学連携も深まり、今後さらなる発展が期待される。

産業能率大学出版部

一五〇〇円

超予測力

フィリップ・E・テトロック

ダン・ガードナー著

一人目の著者はペンシルバニア大学の教授で、予測力を研究し続け、「優れた判断力プロジェクト」の主催者にして、情報先端研究開発局主催の予測トーナメントで優秀な成績を収めている。二人目のジャーナリストは『専門家の予測はサルにも劣る』（飛鳥新社・一六〇〇円）などで知られる人物。本書では、物事を予測する能力がどのようなものを語りながら、「サルのゲーツ投げ」よりも精度が高い超予測力を身に付けるために何をすべきかを論じた意欲作である。

早川書房

二二〇〇円



今月の
おすすめ

人文科学

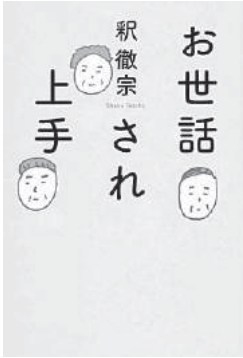
お世話され上手

釈 徹宗著

お寺の住職であり宗教研究者である著者の初めての「自分語り」本。自身が営む認知症高齢者のグループホーム「むつみ庵」の活動を通して、お世話され上手を目指すようになった考えを語っている。その他にも日本仏教について等、様々なテーマについて語られていて、どのテーマも随所に日本社会を考察する手掛かりがあり、仏教者の視点からこれからの社会を生かせるヒントを語った一冊である。

ミンマ社

一六〇〇円



ニセモノ図鑑

贋造と模倣からみた文化史

西谷 大編著 古来、価値あるものには悉くニセモノが作られてきた。贋金、偽文書、書画骨董の贋作から人魚のミイラに至るまで、そんな労力を費やすくらいならもっと建設的な方法があるので、と思うが、騙される人が居る限りはそれで金儲けをしようとするのが人の悲しい性である。面白可笑しくも詳細な解説を国立歴史民俗博物館が監修。

河出書房新社

一六〇〇円

下丸子文化集団とその集団

道場親信著 一九五〇年代、盛んだったサークル文化運動、その中でも光を放った東京南部の下丸子文化集団を取り上げた一冊。左翼的な政治運動のイメージと結び付けられやすいが、これらの文化運動に参加した人々には文化や表現への純粋な渴望があった。米占領下の日本において、自ら詩を書き、芝居をすることによって自分や社会を見つめようとした民衆の精神とは。二〇〇三年から本研究を行ってきた著者の集大成。

みずす書房

三八〇〇円

「グローバル人材育成」の英語教育を問う

齋藤兆史・鳥飼玖美子・大津由紀雄・江利川春雄・野村昌司著

政府主導の性急な英語教育改革に対し、学理的な議論の必要性を問うブックレットシリーズの第三弾。グローバル化に対応する英語教育をテーマにした公開講座の講演の臨場感を保ちつつ、重要な論点を加筆。養老孟司をゲストに、グローバル化の問題を斬る鼎談を巻末に収録。

ひつじ書房

一二〇〇円

鈍感な世界に生きる敏感な人たち

イルセ・サン著

五人に一人は該当すると言われる、HSP (Highly Sensitive Person) としても敏感な人たち。現代では、外交的であることに価値があると思われがちであり、HSPの人たちはともすれば内気、神経質などのレッテルを貼られてしまう。しかしこれは、控えめで、物事をゆつくりと熟慮する、という一つの立派な性質であり、それを受け入れることによりHSPの長所は輝く、と著者は言う。

デイスカヴァー121

一五〇〇円



文学・文芸

我ら荒野の七重奏 セブテット

加納朋子著

パリバリのキャリアアウーマンである主人公がPTAを舞台に大暴れした『七人の敵がいる』（集英社文庫・六二〇円）。その続編で中学生になった息子が吹奏楽部に入った本作では、ミセス・ブルドーザーこと陽子の活躍（？）の場は吹奏楽部の親の会へと変わった。子どもたちの活動を支えるための舞台裏は、お金も手間もかかり人間関係もいろいろあつて、ドロドロしていたり痛快だったり笑えたり泣けたりと忙しい。三年間の奮闘を綴る、親が主役の部活動小説。

集英社

一五〇〇円

ぼくのミステリ・クロニクル

戸川安宣著 空天太郎編

八〇年代末からのいわゆる新本格ミステリブームを支えた編集者の一人であり、東京創元社の社長も務めた戸川安宣

氏の回顧録。退職後は吉祥寺でミステリ専門書店も運営し、「読む・編む・売る」を究めたミステリ人生を振り返る。

翻訳出版の裏話や、有栖川有栖・北村

薫など東京創元社からデビューした作家たちとの交流も、もちろん楽しいが、幼少期からの読書体験もとても興味深い。

昭和二十二年生まれの著者は、創元推理文庫の創刊直後からほぼリアルタイムで読んでおり、社会派が主流であった国内ミステリの状況を含めて、貴重な証言が満載。

国書刊行会

二七〇〇円

トモトミの野望

小説・巨大自動車企業

梶山三郎著

経済小説は数多くあれど、意外にも自動車会社を舞台にしたものは少ない。

しかも本書はあのトップ企業をあきらかにモデルにしており、事実に基づいたと思われるエピソードも満載で興味深く読める。とくに創業家との関係が非常に日本的で考えさせられる。

ただ暴露本のような内容なのではなく、世界を相手に戦う日本のトップ企業で、

どのような経営や人事が繰り広げられているのが人間ドラマとしてよく描かれており、一気に読破できてしまう。タフな自動車産業の内実に触れることができ、下手な業界本を読むよりオススメである。

講談社

一七〇〇円

メシマズ狂想曲

秋川滝美著

「居酒屋ほったくり」シリーズなどで人気の著者の最新作がついに発売された。今回の作品もこれまでのものと変わらず読む人を温かい気持ちにさせる作風だ。

主人公滝田和紗は、仕事はパリパリですが、それ以外の事についてはどうもイマイチな三十四歳独身、彼氏なし。それでも持ち前の負けん気の強さで何とかしようとすの彼女の姿が、思わず自分自身と重なってしまう。

一方で十年來の職場のライバル・村越豪との料理バトルにも注目が集まる。初めは全く何もできなかった二人だが、腕を上げていくにつれて生じてくる互いへの対抗心や恋のかけひきなど、こちらも見どころ満載だ。

小学館

一四〇〇円

今月の
おすすめ

文庫・新書

めづろ
目囊

加門七海著

いとこの嫁ぎ先の古い土蔵で見つかった「目囊」という古文書の内容が怪談にまつわるものだと思ったとき、怪談作家の鹿野南は喜び勇んで預かった。

虫がでる。体調を崩す。なにかを、みた気がする。些細なことだと、そんな風に片付けられるような出来事も続いて起これば、不安は澱のように沈んでいく。

ひらきははじめた怪異がゆっくりと、彼女の冷静さや客観性を失わせていく様子が静かに恐ろしかった。

人の想いとはこれほどまでも重く、そして手に負えないものなのか。

好奇心やささいな善意など、なんの役にも立たない。その場をすみやかに立ち去ることが最善の策であるような、そんな恐怖がここにある。

温かい布団の中で読むのにふさわしい、悪寒の走る一冊である。

光文社文庫

五四〇円

ユナイテッド・ステイツ・
オブ・ジャパン 上・下

ピーター・トラリアス著

第二次世界大戦で日独の枢軸国側が勝利した世界で、日本に支配されるアメリカが舞台。陸軍検閲局勤務の石村紅功大尉は、消息を絶ったかつての上官を探す、特別高等警察の槻野昭子課員の訪問を受ける。心ならずも共に上官を探す二人を待ち受けるものとは。舞台設定はP. K. ディックの『高い城の男』を思い起こさせる。

日本のポップカルチャーに大きな影響を受けた著者による架空の「ユナイテッド・ステイツ・オブ・ジャパン」は、同じくディックの『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』(と、それを原作とした映画「ブレッドランナー」)の世界にも通じるものがある。著者が自ら『高い城の男』の精神的統編(解説より)と呼ぶ本作は、二十一世紀の現在に現れるべくして現れた「統編」と言えるだろう。

ハヤカワ文庫

各七〇〇円

月9 101のラブストーリー

中川右介著

「月9」とは、フジテレビ系の月曜日夜九時台のドラマ放送枠のことである。

一九八〇年代後半の「業界ドラマ」から始まったこの枠は、九〇年代初めからはいわゆる「トレンディドラマ」の枠として高視聴率をたたき出し、俳優にとっても出演することがステータスとなった。

都会を舞台にした若い男女の華やかな恋愛ドラマ、人気俳優やアイドルの起用、最新ファッション、印象的なテーマ曲……人気が出る要素はいろいろあったが、皆が夢中になったのはそれ以上のものが「月9」にあったからではないだろうか。ドラマは時代の空気や気分を反映する。

録画やオンデマンドで、いつでも見たいものを見られる便利な世の中にはなったが、その「月曜日」の「夜九時」でないと見られない、その時に見てほしい、という作り手の気概、切実な思いが感じられるジャーナリズムとしてのドラマがなくなっている、と著者は指摘する。

TVドラマを通して昭和から平成のTVの歴史を振り返ることができる一冊。

幻冬舎新書

一三〇〇円

今月の
おすすめ

芸 術

観察力を磨く

名画読解

エイミー・E・ハーマン著

本書はいわゆる「名画の見かた」の本ではない。アートを観察、分析し、それを伝達する力をつけると、仕事にもその力を活かすことができると著者は提唱している。

名画を利用して観察力を磨く訓練を積むことで、仕事だけではなく、命の危険にさらされるような場面でも、観察力、そして分析力があれば危険を回避することが可能だという。実際に著者は危険と隣合わせの仕事をしているFBIやCIAでも講義を行っている。

一枚の絵を観て事実だけを伝達しているつもりでも、そこには観る人によって様々なフィルターがかかっていることに気づく。事実だけを伝達することは実はとても難しい。

早川書房

二五〇〇円

ババア、ノックしろよ!

TBSラジオ「ライムスター宇多丸の

ウィークエンド・シャッフル」編

自身の部屋で何かしらの「コト」を起こそうとした際、図ったかようなタイミングでお母さん（ないしお父さん、兄弟、祖父母など）が現れ、バツの悪い思いをしたことのある方も多いのではないだろうか。

本書は、ラジオ番組「ライムター宇多丸のウィークエンド・シャッフル」で大人気の投稿コーナーを書籍化したものである。

投稿者の実体験だからこそ身近に感じ、思わず共感してしまうエピソードが満載。自分が当事者になったら……と考えると顔から火が出るほど恥ずかしい話のだけれども、それも「思春期の苦しい思い出」と笑って振り返ることができるのは、辱めを与えたお母さんに悪気がなかったからなのだろう。

子どもを愛しているからこそ発生してしまったハプニングの数々。ラジオを聞いたことのない方にも楽しめる一冊となっている。

リトルモア

一四〇〇円



カール・ラーション

スウェーデンの暮らしと愛の情景

荒屋鋪透著

スウェーデンの国民的画家、カール・ラーション。主に水彩画を得意とし、絵画だけでなく挿絵やイラスト作品も多く手掛けた画家である。

「わたしの家」と題し、自身の家と家族をモチーフに描いたシリーズや、穏やかな田園風景、また、人々の日常を色鮮やかな水彩画で描いた作品が収録されている。

今にも笑い声が聞こえてきそうな、暖かな愛に満ちた作品の数々について見入ってしまう。

プレゼントにもおすすすめの美しい一冊である。

東京美術

二六〇〇円

今月の
おすすめ
実用書
地図・旅行書

あなたの知らない
美しく怖い花言葉

池上良太文著

このタイトルを見て好奇心を抱いたのはおそらく私だけではないと思う。黒地に赤い字でひたすら花の名前が書かれている裏表紙は特に恐怖感を煽っており、怖いもの見たさを操られる。

自身は綺麗な花の写真に絶妙なバランスで花言葉が添えられており、自然とページをめくる手が進んでいく。例えば、「アネモネ」の花言葉は「嫉妬のための無実の犠牲」というまさに美しく怖い言葉だし、秋に咲くムラサキ色の花【トリカブト】は「復讐」というわかりやすい意味が込められている。花束を人に贈る際良い言葉を調べることは多くても、マインナな意味のものを調べる機会はないため、新鮮味があり面白いなと感じた。他にも【キノコ】「わたしはあなたの全部を信用できない」や、【パセリ】「死

の前兆」など、身近な植物にも花言葉が付いており、話のタネにももってこいだ。そもそも何故、そんな意味なのか。花言葉の多くは海外で付けられている事が多いためで、その成り立ちも本書には紹介されている。花にはそこまで興味がない方でも楽しめること間違いなしである。

新紀元社

一二〇〇円

魔女の12カ月

飯島都陽子著・絵

J・K・ローリングの描く魔法使いの物語が、世界を賑わせている今日この頃。ここ日本でも、古き良き時代の魔女について理解を深められる、魅力的な書籍が刊行された。

本書は三十年以上にわたって著者が発行してきた、『魔女通信』を纏めたもの。自然からの恵みを最大限に利用して生きていた魔女たちの、暮らしと知恵を季節の流れに沿って紹介する。

横浜元町の商店街には、著者が営むハーブと魔女の専門店「グリーンサム」が佇む。植物などの香りがほのかに漂う店内は、不思議な雰囲気包まれている。手作りのキッチンウィッチャーやハーブ

ティーなど、ここでしか手に入らないものも多数あるので、読後に足を運ぶことをお勧めしたい。

山と溪谷社

一三〇〇円

スタジアムの宙に
しあわせの歌が響く街

天野春果著

Jリーグで「ホームタウンで大きな貢献をしているクラブ」六年連続一位に輝く川崎フロンターレ。その快挙を支えるのがクラブのプロモーション部部長の天野氏だ。

『宇宙兄弟』とコラボしたイベント「宇宙強大2DAYS」では国際宇宙ステーションとの生中継を成功させるなど、常に来場者の想像の斜め上をいく企画で盛り上げてきた。不可能に思えた案が、出会った人々を巻き込みながら実現していく様はスポーツの可能性を示してくれる。川崎在住以外にも一読いただと伝わるだろう。妬ましさなど超えて、純粹に川崎が羨ましいのだ。こんなプロスポーツクラブが地元にあったらと思うずにはいられない。

小学館

一四〇〇円

今月の
おすすめ

語学・辞典



Q&A Diary

英語で三行日記

アルク英語出版編集部編

本書は手軽に英語日記を始められる工夫が詰まった一冊だ。英語日記を書くことで、英語に触れる習慣を自然に身につけられる。しかし毎日書く内容を考えるのは大変なうえ、英語を書くこと自体が初級者にはなかなか難しい。

三六六個の質問に毎日三行程で答えていく形式で、「最近ハマっているものは？」「あなたの夢は？」など身近な質問で答えやすい。さらにお手本となる例

文も載っており、初級者はそのまま書き写すことから始められる。例文を少し変えて自分なりの英文にしたり、例文を参考にいちから英文を作るといった自身のレベルに合わせて書くことができる。

さあ今日から英語日記を始めて、英語に慣れる習慣を身につけよう。

アルク 一五〇〇円

会話もメールも

英語は3語で伝わります

中山裕木子著

特許翻訳のプロならではの視点で、誰

にでも伝わる英文の秘訣を紹介する。

ここで主題となるのがSVO（主語＋動詞＋目的語）、つまり「誰かが何かをする」という文型である。どんなに複雑な文でも、この三語による明快な言い換えが可能だと著者は説く。また、構文やイデオムといった煩多なルールを捨て去ることで、文章が組み立て易く誤りが減るといふから、期待は高まるばかりだ。

本書では、主軸となる主語と動詞の選び方から「三語の英語」の組み立てパターンを丁寧に教えてくれる。英語学習への興味を再燃させてくれる発送転換の書と

して、是非ご一読いただきたい。

ダイヤモンド社 一五〇〇円

「ハリー・ポッター」Vol.8が
英語で楽しく読める本

クリストファー・ベルトン著

『ハリー・ポッター』を原書で読みたい人のために、語彙リストや解釈を載せたシリーズの第八弾。

原文に描かれている登場人物や物語の背景などが、日本語でまとめられている。また、シリーズを読んだことがない人にもわかりやすいように、既刊に出てきた知っておきたい情報などをコラムに載せている。さらに、イギリス文化にも触れているので、それらを読むだけでも物語の世界観を味わうことができる。逆に、読んだことがある人でも、細かい設定のおさらいや新たな解釈ができるようになっていく。

巻末にはシリーズを通しての類出語句や語彙レベル比較表などがあるので、文章の構成を知る助けになる。

本書を参考に原書を読み進めていけば、楽しく英語の読解力がつくだろう。

コスモビア 一五〇〇円

今月の
おすすめ

児童書

ふたりはバレリーナ

バーバラ・マクリントック作
福本友美子訳

ちいさな女の子エマとバレリーナの
ジュリア。年も住んでいる場所も全くち
がうけれど、バレエに夢中なふたりの一
日は起きた瞬間からそっくりです。バレ
エが好きでたまらない！そんなふたりの
気持ちが絵本の画面からあふれています。

ほるぶ出版

一五〇〇円

きょうは クリスマス

小西英子絵・文

クリスマスがもうすぐぐやってきました。
街は華やかに彩られ、大人も子どももわ
くわく胸をおどらせています。サンタ姿
でお手伝いしていた少年は、聖誕劇に
羊飼いの役で出ることに。冬の澄んだ星
空の下、聖なるクリスマスを迎えるよろ
こびを温かく丁寧に描いた絵本です。

至光社

一三〇〇円

ホイツパーウイ川の伝説

キャシー・アッペルト&アリスン・マギー著
吉井知代子訳

記憶の中でいつもジュールズには追いつけない速さで駆けていく姉。ひたすらに速さを求めた理由を知りたくて、ジュールズは姉が消えてしまった森へと足を踏み入れます。時を同じくしてこの世に誕生したキツネのセリとの不思議な魂の結びつきによって、少女は姉が語ることもなかった真実へと導かれていきます。二人の著者の世界が合わさり、生まれた魂が廻る森の物語です。

あすなろ書房

一四〇〇円

昆虫たちの世渡り術

海野和男著

この地球上に、現在一〇〇〇万種類以上いると言われていた昆虫。長い歴史の中で、様々な環境に適応しながら進化してきました。

敵の目を欺くため、葉っぱなど別の物そっくりな姿になった（擬態）。昆虫同士だけでなく、受粉など植物とも互いに助け合う（共生）。子孫を残すためプレゼントを贈るなど様々な手段が繰り広げ

られる（求愛）。人間と同じように「社会」を持ち、群れで暮らす（集団活動）。本書は四つのテーマでその熾烈な世界を生きた世渡り術を紹介します。昆虫たちの多様性と魅力に引き込まれます。

河出書房新社

一三〇〇円

シャクルトンの大漂流

ウィリアム・グリル作 千葉茂樹訳

二十世紀初頭の英国の探検家シャクルトンの南極探検については他にも本が出版され、映画にもなりました。

シャクルトンは南極大陸横断を実現するため、資金集めをします。必要な資金が集まると、隊員を選び、犬を集め、頑丈な船エンデュアランス号を購入し、道具や物資を積み込みました。一九一四年シャクルトンと隊員たち、そして犬たちは南極大陸横断へ出発します。しかし、流水に出くわした後、エンデュアランス号は水に押しつぶされ沈没。水の上逃げ出した隊員たちは十七か月もの間想像を絶する過酷な旅をし、奇跡の全員生還を遂げました。読後には、いろんな思いが刻まれるでしょう。

岩波書店

二〇〇〇円

『読書と日本人』

加藤 整

わが国では本はどのように読まれて来たのか、これから本はどうなっていくのか、というのがこの本の内容です。

本書で著者は、二十世紀を「読書の黄金時代」だといわれています。これが可能になったのは、印刷技術など本の大量生産技術の開発、流通過程の効率化などに加えて、教育制度の確立による読者層の拡大などに成功したからです。

しかし、昭和十年代から戦後しばらくは紙不足で困難な時代がありました。やがて、映画、テレビ、ラジオ等の様々なメディアの普及によって本の位置付けが変わってきたものの、本がその中心にあることは変わりありませんでした。

そして二十一世紀に入ると電子本が注目を浴びることとなりました。これが〈紙の本〉に及ぼす影響

は大きなものであることは周知のことです。しかし著者は「本というメディアが歴史上はじめて〈紙の本〉と〈電子の本〉というふたつの方向に分岐しようとしている。私たちがふつう『読書』とよんでいる行為は、自分のあいだ、〈紙の本〉が担っていくことになるだろう。たとえ〈読書の黄金時代〉が終わろうとも、〈紙の本〉による読書は終わらないだろう」と結論付けておられます。〈紙の本〉に愛着をもつ者にはうれしいことですが、それにしても書店が次々と店を閉めていく姿は何とも寂しいことです。

(無職・八十一歳)

*『読書と日本人』(岩波新書・津野海太郎著・八六〇円)

『クモの糸でバイオリン』

西村 登

著者はふとした折に「クモの糸」の不思議に魅せられる。自ら問いを発し、精緻な観察力と生体高分子学で鍛えたスキルを駆使して研究を進める。もちろん試行錯誤の連続、だが結論に至る過程は極めて慎重である。例えばクモの糸の強さを調べる一つの過程で「紫外線UV・Aの照射で破断応力が上昇する」という全く予想外の結果を得たのに対し、測定誤差ではないかと、クモが成体になる毎夏を待つと同様の測定を五年間にわたって繰り返しすといったようにである（三十二頁）。

各種の試験が続く。大量のクモの糸を集めてハンモックを作り、自身その中に入ってぶらさがってみたり、同じく大量のクモの糸でトラックを引っ張ってみたり、はてはクモの糸でバイオリンを作って奏でてみたり、夢は次々と膨らむ。バイオリンを購入し、レッスンに通う。あちこちから数万本のクモの糸を集めて生体高分子学的測定を繰り返し「よい音」を出すバイオリンの弦作りに挑む。悪戦苦闘が続く。

ついにプロのバイオリニストに弾いてもらう日が来る。しかも超名器ストラディバリウスの音色に優ると言う証言を得る。

苦節四十年の成果を世界に発信する。クモの糸を張ったバイオリンのすばらしい音色に対し、検索エンジンでは五億四〇〇〇万件に上昇。イメージンググレースは世界に響く（一〇六頁）。

著者は本書のあとがきで「私の一連のクモの糸の研究は、趣味でやったから、すぐに成果を求められなかった。それでいろいろな角度からアプローチしてきた」と述べる。

この言葉そして実践こそ、サイエンスの真髄だと思う。特に若い学徒に必読の書である。

（八十八歳・元教員）

*『クモの糸でバイオリン』（岩波科学ライブラリー）
大崎茂芳著・一二〇〇円

『堆塵館』

佐藤 純子

表紙に描かれた顔色の悪い少年の絵が気になるこの本は、十九世紀のロンドン……の中でも特殊な「堆塵館」と呼ばれる場所を舞台に書かれた、一見するとファンタジーだ。しかし、ファンタジーと言うには妙な現実感がある。むしろ現実を浸食してしまいそうなほどの不思議な世界観に、読み始めたら止まらなくなった。

近年、世界の有名な物語のあらすじをまとめた本をよく目にするけれど、それを手にするのは本当の意味での読書とは呼べないと思う。あらすじを文字で追って情報を得たいだけならば、ネットで調べれば事足りる。本物の読書は、そんな薄っぺらいものじゃない。

作者が魂を込めて考えて選んで綴った言葉を味わって、そこから読み手である自分だけが構築できる想像の世界に身を委ねる、それこそが読書の愉しみではないか。

この物語は、読み進めるうちに、およそ考えもつ

かないような世界へと見事に連れて行ってくれる。簡単に映像化などできない、読んだ人だけが味わうことのできる圧倒的な文章の世界がここにある。

たくさんの情報や映像が氾濫するなか、私たちはいつの間にか想像することの楽しさを置き忘れてきたのではないだろうか。まだ大きな空想力で遊べる少年少女はもろろん、昔子供だったすべての大人にこそ、ぜひお勧めしたい。読めばきっと思い出すはずだ。本を読むってこんなに楽しいことだったのだと。

(三十四歳・会社員)

*『堆塵館』(東京創元社・エドワード・ケアリー著・三〇〇〇円)

ATION

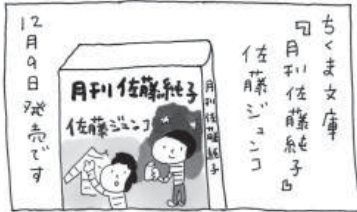
<p>ジュンク堂書店 ＝名古屋栄店＝ ☎(052)212-5360 [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善 ＝名古屋セントラルパーク店＝ ☎(052)971-1231 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝口ト名古屋店＝ ☎(052)249-5592 [営業時間] 10時半～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝名古屋店＝ ☎(052)589-6321 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝岐阜店＝ ☎(058)297-7008 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝四日市店＝ ☎(059)359-2340 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝滋賀草津店＝ ☎(077)569-5553 [営業時間] 10時～22時</p> <p>丸善 ＝京都本店＝ ☎(075)253-1599 [営業時間] 11時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝京都店＝ ☎(075)252-0101 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝高槻店＝ ☎(072)686-5300 [営業時間] 10時～22時</p>	<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝梅田店＝ ☎(06)6292-7383 [営業時間] 10時～22時</p> <p>丸善 ＝関西国際空港店＝ ☎(072)456-6486 [営業時間] 7時～21時半</p> <p>丸善 ＝八尾アリオ店＝ ☎(072)990-0291 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝高島屋大阪店＝ ☎(06)6630-6465 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝大阪本店＝ ☎(06)4799-1090 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝難波店＝ ☎(06)4396-4771 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝天満橋店＝ ☎(06)6920-3730 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝上本町店＝ ☎(06)6771-1005 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝梅田ヒルトンプラザ店＝ ☎(06)6343-8444 [営業時間] 11時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝近鉄あべのハルカス店＝ ☎(06)6626-2151 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝奈良店＝ ☎(0742)36-0801 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝西宮店＝ ☎(0798)68-6300 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝芦屋店＝ ☎(0797)31-7440 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝神戸住吉店＝ ☎(078)854-5551 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝三宮駅前店＝ ☎(078)252-0777 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝三宮店＝ ☎(078)392-1001 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝神戸さんちか店＝ ☎(078)335-2877 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝舞子店＝ ☎(078)787-1250 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝姫路店＝ ☎(079)221-8280 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝岡山シンフォニービル店＝ ☎(086)233-4640 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>丸善 ＝広島店＝ ☎(082)504-6210 [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝広島駅前店＝ ☎(082)568-3000 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝高松店＝ ☎(087)832-0170 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝松山店＝ ☎(089)915-0075 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝博多店＝ ☎(092)413-5401 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝福岡店＝ ☎(092)738-3322 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝大分店＝ ☎(097)536-8181 [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善 ＝天文館店＝ ☎(099)239-1221 [営業時間] 10時～20時半</p> <p>ジュンク堂書店 ＝鹿児島店＝ ☎(099)216-8838 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝那覇店＝ ☎(098)860-7175 [営業時間] 10時～22時</p>
---	---	--	---

<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 札幌店 ＝ ☎(011)223-1911 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 旭川店 ＝ ☎(0166)26-1120 [営業時間] 10時～19時半</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 弘前中三店 ＝ ☎(0172)34-3131 [営業時間] 午前10時～午後7時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 盛岡店 ＝ ☎(019)601-6161 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 仙台アエル店 ＝ ☎(022)264-0151 [営業時間] 10時～21時 日・祝10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 仙台TR店 ＝ ☎(022)265-5656 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 秋田店 ＝ ☎(018)884-1370 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 郡山店 ＝ ☎(024)927-0440 [営業時間] 10時～19時</p> <p>丸善 ＝ 水戸京成店 ＝ ☎(029)302-5071 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 丸広百貨店飯能店 ＝ ☎(042)973-1111 [営業時間] 10時～19時</p>	<p>丸善 ＝ 丸広百貨店東松山店 ＝ ☎(0493)23-1111 [営業時間] 10時～19時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 大宮高島屋店 ＝ ☎(048)640-3111 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 桶川店 ＝ ☎(048)789-0011 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 津田沼店 ＝ ☎(047)470-8311 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 舞浜イクスピアリ店 ＝ ☎(047)305-5808 [営業時間] 11時～21時、土・日・祝10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 松戸伊勢丹店 ＝ ☎(047)308-5111 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 南船橋店 ＝ ☎(047)401-0330 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 柏モディ店 ＝ ☎(04)7168-0215 [営業時間] 10時半～20時</p> <p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 渋谷店 ＝ ☎(03)5456-2111 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 丸の内本店 ＝ ☎(03)5288-8881 [営業時間] 9時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 日本橋店 ＝ ☎(03)6214-2001 [営業時間] 9時半～20時半</p> <p>丸善 ＝ お茶の水店 ＝ ☎(03)3295-5581 [営業時間] 月～金10時～20時半 土10時～20時 日・祝10時～19時</p> <p>丸善 ＝ 多摩センター店 ＝ ☎(042)355-3220 [営業時間] 10時半～21時</p> <p>丸善 ＝ 有明ワンザ店 ＝ ☎(03)5530-5701 [営業時間] 10時～19時半</p> <p>丸善 ＝ メトロ・エム後楽園店 ＝ ☎(03)5684-5130 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 新宿京王店 ＝ ☎(03)5321-8327 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 池袋本店 ＝ ☎(03)5956-6111 [営業時間] 月～土10時～23時 日・祝10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ プレスセンター店 ＝ ☎(03)3502-2600 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 大泉学園店 ＝ ☎(03)5947-3955 [営業時間] 10時～22時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 吉祥寺店 ＝ ☎(0422)28-5333 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 立川高島屋店 ＝ ☎(042)512-9910 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ ラゾーナ川崎店 ＝ ☎(044)520-1869 [営業時間] 10時～22時</p> <p>丸善 ＝ 横浜ポルタ店 ＝ ☎(045)453-6811 [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 藤沢店 ＝ ☎(0466)52-1211 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 新潟店 ＝ ☎(025)374-4411 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 岡島甲府店 ＝ ☎(055)231-0606 [営業時間] 10時～19時</p> <p>丸善 ＝ 松本店 ＝ ☎(0263)31-8171 [営業時間] 10時～20時</p> <p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 新静岡店 ＝ ☎(054)275-2777 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 名古屋本店 ＝ ☎(052)238-0320 [営業時間] 10時～21時</p>
--	---	---	---

営業時間は変更する場合がございます。ご了承ください。

定休日については、お手数をおかけしますが弊社HPまたは直接各店までお問い合わせ下さい。

ブックブレスター



投稿募集

☆読者の皆様の投稿を募集しています。最近読まれた本の感想文、本にまつわるエッセイ、など本に関するもの。最近読んでおもしろかった本、感動した本、考えさせられた本を教えてください。四〇〇字×六〇〇字程度で、おすめの本のタイトル、出版社、住所、氏名、年齢、職業を明記の上、お送り下さい。掲載分には二千円の図書カードを差し上げます。なお、原稿はお返しいたしませんのでご了承ください。

☆尚、本誌掲載と同時に、ホームページにも掲載させていただきます。

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二一五五一
丸善ジュンコ堂書店「書標」編集室係
TEL〇三―五九五六―六一一

いつも「書標」をご愛読いただきましてありがとうございます。本誌定期購読料は以下の通りです。

定期購読料 年間二二〇〇円（送料込）
現金書留もしくは八十二円切手十五枚で

お申し込み先

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二一五五一
丸善ジュンコ堂書店特急係
TEL〇三―五九五六―六一二〇
FAX〇三―五九五六―六一〇〇

編集後記

今年も一年間ご愛読いただき、ありがとうございます。年末年始は定休日や営業時間が変則的になる店舗があります。お手数をおかけしますが、事前にご確認の上ご来店くださいませ。

今号は、最初と最後に広島カープの赤で染め、その熱さを伝えていただいた。うらばなしの「カプ子」はカープ女子のカプ子との由。

(緒)



QRコード

PC・スマートフォンから
<http://www.junkudo.co.jp/>



「とある書店と カープの一年」

今回の本屋うらはなしは、丸善広島店が担当いたします。広島といえはプロ野球セ・リーグ優勝の熱狂を色濃く残した、広島東洋カープの本拠地のある街。日本一こそ逃しましたが、今年の快進撃は多くの人々の心を動かしました。他球団のファンの方もおられるとは存じますが、今回だけ、どうぞご容赦下さいませ。

思い起こせばこの一年、本当に沢山のカープ関連本が店頭を賑わせてくれました。雑誌の特集号や記念ムック、重松清さんの『赤ヘル1975』をはじめとする小説、今年惜しまれつつも引退された黒田博樹投手の『決めて断つ』等多くの「カープ本」が当店の週間ランキングの常連となりました。今年出版されたもの

でなくても改めて手に取られる方も多く、かく言う私も『もう一度投げたかった——炎のストッパー津田恒美最後の闘い』を再読し勇気ももらいました。また、書籍だけではなくカープのDVD、カレンダー、カープ手帳等も多くのお客様に手にとって頂けました。特にカープカレンダーは去年の三倍を仕入れていたのですが、あつという間に売切れてしまったほど。年々カープ熱の高まりを感じていましたが、今年ほどそれを実感できた年はありません。

カープの優勝が決まった九月十日以降、広島街は文字通り真っ赤に染まりました。アーケードやビルに横断幕がかり、沢山の優勝ポスターが貼られ、各種のセールが始まる中、丸善広島店も何かお祝いしたいとカープコーナーを作りました。カープの本を並べ、カープグッズで飾り付けをしたその一角は多くのお客様に足を止めて頂くことができました

た。出版社の営業の方も「これは広島ならではですね」と驚いて下さったこのカープコーナー、飾り付けたグッズのほとんどはスタッフ有志の私物です。呼びかけると自然と集まってくるあたりが「広島ならではの」なのでしょうね。

最後に、今年の締めくくりにカープに関わる名言を引用させて頂きます。「耐雪梅花麗（雪に耐えて梅花麗し）」黒田博樹投手が座右の銘にしているという言葉、西郷隆盛が甥に送った漢詩の一節なのだそうです。辛い冬を乗り越えてこそ美しい花を咲かせる梅。逆に言えば、苦境を乗り越えねば大成することはできないということでもあります。書店業界も厳しい季節が続いていますが今は耐え忍ぶ時。いつの日か花を咲かせ、お客様の笑顔に繋げる事ができれば書店員としてこれに勝ることはありません。

それでは皆様、どうぞよい年をお迎え下さいませ。

(カプ子)

「書標 ほんのしるべ」 第457号

編集・発行人 工藤 恭孝

発行所 (株)丸善ジュンク堂書店

印刷所 (株)七 旺 社

二〇一六年十二月五日発行 頒価五十円(本体四十六円)

〒160-0008 東京都新宿区三栄町二十九 ニューフィールドビルディング

〒653-0013 神戸市長田区一番町二丁目一

「書標ほんのしるべ」昭和61年7月15日第三種郵便物認可
2016年12月5日発行（毎月1回5日発行 通巻第457号）



日本全国で
3,000万冊の品揃え!
丸善ジュンク堂書店

頒価 五十円（本体 四十六円）

ジュンク堂書店

淳久堂書店

M MARUZEN